

# 遠藤周作『沈黙』に託されたもの

——「沈黙」のオーケストラ——

栗原浪絵

はじめに

遠藤周作は、自分の死後、『沈黙』と『深い河』の二つの作品を棺に入れて欲しいと頼んだと言<sup>(1)</sup>う。『沈黙』は作家自身が認める代表作であると同時に、当初、カトリシズムの世界を中心に凄まじい非難を受ける問題作でもあった。<sup>(2)</sup>主な批判は主人公ロドリゴが「踏み絵を踏む」罪を犯す<sup>(3)</sup>前に神の声を聞いてしまっているということであった。神は人間の犯した過失に対しては許しを与えることは可能であるが、罪を犯すことを最初から認めるようなことは存り得ないという論理で遠藤は糾弾されたのである。<sup>(3)</sup>ここには二つの前提が隠れている。一つには「ロドリゴの信仰＝遠藤周作の信仰」という解釈である。この誤解は作家論と作品論という枠を持ち出さずとも少し考えれば訂正されやすい。この種の誤解は信仰と文学という二つの領域を歩いていた遠藤にとって、本人自身が

一生背負わなければならない重荷であった。もう一つの前提はこの小説の主題を「神の沈黙に耐えられない人間の信仰の墮落の過程」と読み取ることである。ロドリゴが踏み絵を踏んだことを、キリスト教を捨てた行為と見なすと極論から言えば、「ロドリゴ神父は日本という風土に敗北し、己の信仰を捨てたのだ」あるいは、「ロドリゴ自身、最初から正当なキリスト教信仰は持っていなかったのだ」という論さえ出てくる。<sup>(3)</sup>

一方、江藤淳氏は『成熟と喪失』で遠藤の「母なるもの」への信仰を見抜き、独創的な見解を示した。<sup>(4)</sup>それによれば、遠藤は「父」なる神を抹殺することによって「母」との合体という母子相姦をなしとげたとする。江藤は作者自身の個人的な母への思いを考慮に入れて、踏み絵を踏むという裏切り行為が同時に、共に苦しんでいた母なる神の許しであるという逆転の真理を読み取ったのである。同様に、井上神父は「同伴者イエス」の中で母なる神の理解がカトリック神学におけ

る聖書理解に基づくものであるとした。<sup>(5)</sup>この論文においては、一体『沈黙』で遠藤が持ち出したテーマは何であったのか、丹念に整理しつつ、再検討したい。特に、『沈黙』には重層的な意味のレベルが存在することを明白にすることが、本稿の目的である。

### 1、『沈黙』の源泉と構図

これまで『白い人・黄色い人』や『海と毒薬』で日本人の希薄な罪意識や西洋との違和感を描いてきた遠藤周作が『沈黙』を発表したのは昭和四十一年、芥川賞受賞から十一年が過ぎていた。彼にとって『沈黙』を生み出す精神的基盤は三年余に及ぶ闘病経験が大きかった。

昭和三十四年、遠藤はエルサレムに巡礼し、サドの研究も兼ねてヨーロッパ各地を旅行した。帰国後、肺病が再発し翌年には二度の手術を受けるが成功しなかった。三度目の手術を受けるかどうかの判断は本人が決めるしかないというほど危険なものであった。命は取り止めたものの、なかなか体力は回復せず、三年間の入院生活を送ることになった。<sup>(1)</sup>生死を見つめた体験の意味は大きい。「神の沈黙」というテーマは、外部から制度的、歴史的に与えられたものではなく、彼の内面での苦悩、信仰への思いが深く沈潜して始めて成熟へ向かう。

「病気のあいだは照れくさいことながらやはりカミサマのことばかり考えつづけていた。……だが一番イヤだったのはある夜、私は神は本当は存在していないのではないかという不安に捉われた時だった。二千年のあいだ、神がいるものと信じてそのために生きてきた人間が無数にいる。……しかしもし神などは人間がつくりだした架空の幻影だったとするならば、それらの人間はなんとコッケイな喜劇の主人公であったことだろう。……いよいよ最後の手術の時、私は車のついた寝台にのせられて一度目や二度目の時と同じように手術室にはこぼれていったが、前の時とはちがって見送ってきた妻とも別れ、手術場の厚い扉がしまった時、これがこの世の見おさめだなという気がおそってきた。その瞬間、私は始めてと言っていいほど口惜しい思いで自分の小説のことを思いだした。ああ、書きたいなあと思ったのである。<sup>(2)</sup>」

病気が治った後で初めての長崎旅行に出かけ、小さい踏み絵を見かけた。<sup>(3)</sup>その踏み絵には小さな木の枠がついていて黒い足の指の跡がついていた。踏絵を踏んだ人々の中には、裏切りの思いを持ちつつ踏まざるを得なかったクリスチャンもいたことであろう。この跡が遠藤の想像を刺激し三浦朱門と

共に上智大学へ行き、チースリク教授から話しを聞き、キリシタンの勉強を始めた。ところが踏み絵の上に黒い足跡を残したような弱者の記録は見当たらなかった。遠藤が主人公として選んだジュゼッペ・キャラ神父もクリストバン・フェレイラ神父も大学ノートの五枚を埋めたにすぎなかったと言う。

「歴史とか政治というものは、英雄であるとか聖人であるとか、そういう人についてはみな語るわけです。われわれが歴史の本を読んでも、そこに書かれている登場人物は、みな英雄であったり、立派な人物であって、そういう弱虫についてはほとんど誰も沈黙の灰の中に埋もれたまま語らない<sup>(4)</sup>。」

では、このような「弱者へのまなざし」は具体的に作品『沈黙』においていかに描かれていくのであろうか。第一章はセバスチャン・ロドリゴの書簡として始まり、第四章まではこのスタイルが続く。ポルトガルの神父という日本人の読者には掴み難い存在を書簡形式で主観的に物語することで、読者は着実にロドリゴの心理に入る準備をすることができる。この遠藤の方法については佐伯彰一氏が的確な説明を加えている。

「かりに、終始一貫、純客観体で押し通したとしたら、そも

そも主人公の企図の向うみずな絶望性と、日本の当局側のやみくもな禁圧政策、あまりに頑なで非人道的な拷問の手口ばかりが、読者の前面に大きく立ちはだかる羽目になったろうし、また他方、冒頭からひたすら主人公の手紙や独白だけで押し通そうとした場合は、主人公の投げこまれた状況が、あまりに特異かつ極限的であるので、読者としては少々息苦しすぎ、ついてゆくのが困難になったのではあるまいか。」(『沈黙』新潮文庫 1980 解説 p.263)

第四章は小説の転換部であり、聖書箇所引用部分とロドリゴが想像するイエスの顔が変容する。第三章までは「この街にて迫害せられなば、なお、他の街に行くべし」(マテオ聖福音書)「主にてまします神よ。主こそ光栄と尊崇と能力とを受け給うべけれ」(黙示録)、「ある種はよき壤に落ちしかば穂出でて実り、一つは三十倍、一つは六十倍、一つは百倍を生じたり」(マルコ福音書)という力に満ち溢れた言葉から、突如、「われら、滅びと悪とをむさぼり、道なき荒地地を歩めり」(詩篇)と変容する。同様にロドリゴが想像するキリストの顔も日本に来る船上での「励ますような雄々しい力強い顔」ではなく、「不安と疲労ですっかり歪んでいる追いつめられた男の顔」と変化している<sup>(5)</sup>。呼称も救い主キリストではなく、人間イエスに置き換えられている。遠藤はまた、繰り返し描写

される「海」の上にも、沈黙する神、日本と西洋の間に横たわる距離感を象徴化させている。

「その時、私は、ふとガルベと山にかくれていた頃、時として夜、耳にした海鳴りの音を心に甦らせました。闇のなかで聞えたあの暗い太鼓のような波の音。一晩中、意味もなく打ち寄せては引き、引いては打ち寄せたあの音。その海の波はモキチとイチゾウの死体を無感動に洗いつづけ、呑みこみ、彼等の死のあとにも同じ表情をしてあそこに拡がっている。そして神はその海と同じように黙っている。黙りつづけている。」(『沈黙』p85)

第五章以後は三人称を用いた客観的スタイルの文章に変化する。幾つかの主題が絡み合う客観的手法になるが、「ロドリゴと裏切り者キチジローの関係、ロドリゴと井上筑後守との対決、棄教したフェレイラ神父との再会」の三つが主なテーマである。次章においては、キリストとユダの関係に配置されるロドリゴとキチジローの扱われ方に注目して、「沈黙」という言葉の使われ方を分析したい。

## 2、作品内における「沈黙」の三つのレベル

さて「沈黙」という言葉のシンボルを考察する前に、作品

の中ではどのように沈黙という語が用いられているだろうか。直接、沈黙という言葉が使用されている箇所は意外に少ない。最初に登場するのは、役人に見つからないように隠れキリシタン達が「沈黙」を守るという表現である。当時の社会制度から己を守ろうとする村全体の沈黙は、虐げられた者のみが知る人間の静かな抵抗である。

「私は部落を包んでいるこの怖ろしい沈黙を感じました。一生懸命に祈りました。祈りというものがこの地上の幸福や僥倖のためにあるのではないことはよくわかっていました。が、わかってはいても私は真昼のこの怖ろしい沈黙が早く、早く村から去ることを祈らざるをえなかった。」(『沈黙』p82 傍点筆者)

村人達の集団の沈黙に比べて、ロドリゴのキチジローに対する沈黙は異国における孤独に溢れている。自分を役人に売り渡したのはキチジローではないかという疑いは、ロドリゴを助けようと振る舞う彼に語りかけることを制している。

「私はまだ沈黙をつづけていました。この男が通過した部落はそれぞれ、役人たちに襲われている。頭のなかにさっきから疑心が湧いていたのです。彼が役人の手引きをしてい

たのかもしれない。」(『沈黙』p.91)

こうして、この書の最大のテーマであるとされてきた「神の沈黙」へとドラマチックに物語は昇華していく。

「あの人もその夜、神の沈黙を予感し、おそれおののいたのかどうか。司祭は考えたくはなかった。……モキチやイチゾウが杭にしばられ、沈んでいった雨の海。小舟を追うガルベの黒い頭がやがて力尽きて小さな木片のように漂っていた海。……海はかぎりなく広く哀しく拡がっていたが、その時も神は海の上でただ頑なに黙りつつづけていた。」(『沈黙』p.176)

ここで「神の沈黙」はロドリゴの人生を通して神は語っているのだという「沈黙の否定」神の語りかけ」に辿り着いていることに注意を喚起しなければならない。

「私はこの国で今でも最後の切支丹司祭なのだ。そしてあの人は沈黙していたのではなかった。たとえあの人は沈黙していたとしても、私の今日までの人生があの人について語っていた。」(『沈黙』p.241)

これまでの沈黙論では「なぜ民の苦しみに神が沈黙しているのか」という問いと「現在まで排除されてきた、挫折した宣教師の沈黙の歴史に光を当てる」という二側面が強調されてきた。<sup>(1)</sup>ここで見落とされがちなのは主人公、ロドリゴの沈黙である。キチジローに対してロドリゴはマカオで出会った時から疑惑の念を抱き続ける。キチジローの黄色い醜さの中に狡猾さを読み取る。ロドリゴはキチジローに沈黙することと異教国日本に対しても沈黙をしていた。修道院と呼ぶ山小屋に引き籠り、誰にも見つからない安定した期間が長く続けばいいと願う。キチジローがロドリゴの後を追ってくる箇所でも役人に引き渡されるのではないかとという疑惑は神父の胸から消えることはない。ロドリゴは彼に本心から向かい合っていないなかった。状況に合わせてころころ信条を変える弱い彼の気持ちをロドリゴは決して理解できなかった。

『去れ、行きて汝のなすことをなせ』基督でさえ、自分を裏切ったユダにこのような憤怒の言葉を投げつけた。その言葉の意味が司祭には長い間、基督の愛とは矛盾するもののように思えてきたのだが……、撲たれた犬のような怯えた表情を時々むけている男をみると、体の奥から、黒い残酷な感情が湧いてくるのである。『去れ』と彼は心の中で罵った。『行きて、汝のなすことをなせ』(『沈黙』p.129)

「聖書のなかに出てくる人間たちのうち基督が探し歩いたのはカファルナウムの長血を患った女や、人々に石を投げられた娼婦のように魅力もなく、美しくもない存在だった。魅力のあるもの、美しいものに心ひかれるなら、それは誰だってできることだった。そんなものは愛ではなかった。…司祭はそれを理屈では知っていたが、しかしまだキジローを許すことはできなかった。」(p.149)

両者の関係が最終的に修正されるのはロドリゴが踏絵を踏むという行為をした後なのだ。ここでも逆転の真理が働いている。

「でもひょっとすると、その愛の行為を口実にして自分の弱さを正当化したのかもしれない。それらすべてを私は認めます。もう自分のすべての弱さをかくしはせぬ。あのキジローと私とにどれだけの違いがあると言うのでしょうか。」

(『沈黙』 p.223)

「『主よ。あなたがいつも沈黙していられるのを恨んでいました。』

『私は沈黙していたのではない。一緒に苦しんでいたのに』

『しかし、あなたはユダに去れとおっしゃった。去って、

なすことをなせと言われた。ユダはどうなるのですか』  
『私はそうは言わなかった。今、お前に踏絵を踏むがいいと言っているようにユダにもなすがいいと言ったのだ。お前の足が痛むようにユダの心も痛んだのだから。』(p.240)

ロドリゴが教会制度のもとで最大の誤りを犯すことによってそれでも許されているという神の愛を知って始めて、真の哀れみをキジローに対しても抱けたのである。こうしてロドリゴは司祭の立場を捨てながらも、「安心して行きなさい」とキジローに声をかけた。「ロドリゴの沈黙」は「神の沈黙」が破られたことで、止揚された。これは後に続く「切支丹屋敷役人日記」にも明らかである。ロドリゴとキジローが信仰を捨てきれなかったことが、難解な文書の中に読み取れるのである。<sup>(2)</sup>

「岡田三右衛門召連れ候中間吉次郎へも、違ひ胡乱なる儀ども故、牢舎申し候、囲番所にて吉次郎懐中の道具穿索仕り候処、首に懸け候守り袋の内より、切支丹の尊み申し候本尊みいませ……」(『沈黙』 p.244)

キジローは、岡田三右衛門と改名させられたロドリゴと

共に、キリストへの信仰を最後まで捨て切れず、牢舎での時間を共有したことが察せられる。ただし、この切支丹屋敷役人日記の重みが、どれだけ読者に判読されるかは疑問の余地が残る。

### 3、歴史的「沈黙」のキリシタン時代と遠藤の歴史観

遠藤はキリシタン時代を「明治時代や奈良時代とともに日本における文化的対決の三時代の一つ」と捉えている。<sup>(1)</sup>それは明治時代のように器用に西洋文明の表面をすくい取った時代とは根本的に違い、日本が西欧の最も本質的なキリスト教に向かい合った時期である。キリシタン史を考える際に彼が疑問に思ってきたのは「なぜ現在でも縁遠いキリスト教が日本の各階級の人々に急速に拡がり、彼等の心を捉えたのかということ」と、「なぜ迫害下にあってもあれほど多くの殉教者をだすほどの宗教が根を下ろしたのか」ということであった。<sup>(2)</sup>隠れキリシタンの信仰は土着のマリア崇拜に愛容していることを指摘しつつも、遠藤は西欧キリスト教神学のうちでも最も中核をなすトミズムがこの時期にすでによく咀嚼された日本語で語られていることを認めている。

遠藤にとってキャラ神父やフェレイラ神父のようなキリスト教の歴史から消え去っていた人々に光を与えることは、日本人が近代において受容した西洋的なキリスト教観に別の光

を投じようとする試みでもあった。キリスト教の伝統を持った西洋近代と、キリスト教の伝統を持たない日本の近代の差が遠藤には決定的に感じられたのである。<sup>(3)</sup>

彼が上述の問題意識を持つようになったのは、若い頃遠藤が住んでいたキリスト教の寮で舎監をしていた哲学者、吉満義彦の影響が大きい。遠藤はネオトミズムの影響を受けている吉満の西欧的なキリスト教の考え方を受け入れることは出来なかった。彼は後年エッセーにおいて「岩下神父や吉満氏の著作を読むたびにわたしはいつもある不満をそこに感じていた。中世教父哲学の専門家である岩下神父はともかく、吉満先生の書かれたものは彼の師であるネオ・トミストのジャック・マリタンの影響があまりに強かった。」と語っている。<sup>(4)</sup>

吉満によれば、歴史的な中世は時間の中で過去のものとなるにしても「神学的中世」は、すべての時代に生きた課題として内在している。<sup>(5)</sup>自然と恩寵との関係は人間の内でも永遠に新鮮な真理であることを中世は深く理解していたのである。自然と恩寵との関係は、文化と宗教を見るまなざしの根本となる。文化は倫理的な基準に従わなければならない、自律的な文化や倫理は在りえない。従って文化は倫理が介在することで宗教に発展し、文化は神を賛美する。ここに「世俗的なものの聖化」が要請される。<sup>(6)</sup>ルネサンス以後は人間中心の自己中心的なヒューマニズムであるのに対し、中世は「自己充足

的なヒューマニズム」であった。吉満はヨーロッパ中世の「自己充足的ヒューマニズム」を日本にも作り上げたいことを望んでいた。近代の人間中心的なヒューマニズムが結局は神から離反し、悲劇的な方向に向かうことを吉満は見抜いていた。彼にあっては東洋も西洋も一つであり、キリスト教の超自然的真理の啓示こそが一切を完成する。

しかし日本の汎神的風土を強く感じていた遠藤には、スコラ哲学の、「神と人間との完全な断絶」への違和感を隠し切れなかった。彼はヨーロッパの中世と日本に生きる己とは何の関係も見い出せなかった。この気持ちは、戦後間もない一九五〇年という時期にフランスに留学してますます拡大することになる。

「自分たち日本には西洋におけるキリスト教的伝統のようなものがあるだろうか。もしあるとすればその伝統とは一体、何だろうか。……私自身も外国留学以来、いつも手さぐりをしてきた課題だ。……私にこの課題が生まれたのは、近代のさまざまな人間性の喪失をもう一度キリスト教が支配していた中世を再認識することによって回復しようとしたマリタンやジルソンのような人々の本を読んだときからであった。」<sup>(8)</sup>

「近代における神と人間」というテーマを突き付けられた遠藤はそれを己の中で「神と日本人」という問題に置き換えた。切支丹に関心を持った彼のまなざしは日本における独自のイエス像を示したいという願ひがある。確かに「踏み絵のキリスト」共に苦しみすべてを許すキリスト像」は彼の往年のテーマとなった。一方で、日本人のすべてを曖昧にしてしまう感覚と神という絶対的な倫理感についての相克を描く姿勢は弱まる。『沈黙』において「社会的、制度的な罪」踏み絵を踏む行為」を描くことで、内的な罪への厳しい認識は融解されてしまったかのような印象を受ける。従って、最初に探究すべき課題としてあった「神のない近代に生きる人間像」への追求は彼の作品中には読み取ることが出来ない。

#### 4、神の「沈黙」への思い

なぜ神は黙っているのか。遠藤の問題意識には大量のユダヤ人が虐殺されたアウシュビッツが常に存る。アウシュビッツの収容所で、人々が苦しんでいた時、神は水のようにおし黙り、冷たく傍観するだけで何も意味を与えなかったのだと、どうして断言できようか。しかし、神が沈黙していなかったならば、「どういう意味を与え、どういう語りかけをしていたのか、」そこにいたって遠藤は途方にくれたのである。この疑問に遠藤は三つの選択肢を示している。<sup>(1)</sup>

ア、多くの宗教者は神の沈黙を一種の試練説で説明する。地上の苦しみは我々を「より本質的な生にめざめさせ、近づけ、我々の知恵を浄化する場合がある。」この説明には半ば賛成しつつ、試練があまりにも、きびしい時、押しつぶされてしまいそうな恐怖を感じ、割り切れなくなる。

イ、「神が人間の自由を尊重する」からこそ、神は沈黙しているというキリスト教的な解釈は第一の説明よりはるかに納得できる。この説には、人間は根源的な自由（愛の自由）だけはいかなる状況においても奪われないという前提がある。例としてはアウシュビッツ収容所でわずかなパンを病人に与えた人々が挙げられる。神は人間の他者を愛する自由を最終まで見守ろうとするのだ。だが、この説はすべての人間が極限状況でそのような行為を選択するとは限らない点で納得できない。

ウ、小説を書いている者として、パンを病人に与えず、おずおずと自分の口に入れてしまった常人を責めることはできない。グリーンやモーリヤックのようなキリスト教作家は、人間の内部を情熱や心理だけの面にかぎらない。無意識の世界をキリスト教作家たちは「人間内部の第三の領域」と考える。「私達の情熱や心理では神を裏切っているようにみえても、そこにはひそかに神を志向しているなにかがある。」たとえば愛欲の心理は一見罪をはらむ原因のように思えるが、一方自己

放棄と虚無の心理もある。つまり、愛欲の奥に愛されても愛しても満たされないものがあり、それが神をもとめる無意識の訴えにつながると考える。神はこの第三の領域を通して沈黙<sup>(2)</sup>をしているのではなく語っている。

この三番目の方法を遠藤はキリスト教作家の発見として評価する一方で、やはり満足しきれなかった。人間の心理と第三の領域が見事に結合しないような例が多くあるからである。遠藤は「モーリヤックやグリーンのような従来のキリスト教作家を超えよう」という野望を抱く。神と人間との関係が割り切れないからこそ小説を書く価値がある。

遠藤が究極的に目指していたのは、心理を描くことでもなく、心理の背後にある無意識を表現することでもなく、魂の領域に触れて人間の内部を描き出すことであった。これを彼は「第三のデイメンション」と呼び、魂の部分を掘り下げている聖書を常に模範の書としてきた。ただし、遠藤は「沈黙」の世界では上記のウの前提を超えてはいない。寧ろ、遠藤はウの世界への日本人の作家としての挑戦として、弱者を通して神の働きを示すために『沈黙』を描いたように思う。

『沈黙』においては、複数の沈黙のレベルが存在することが確認できた。遠藤はキリスト教を人間の内部の一面にだけ音を響かせる「バイオリンのソロ」ではなく、良心のみならず

悪の部分にも共鳴する「オーケストラ」であるはずだと考えていた。<sup>(3)</sup>『沈黙』において重層的に明示された沈黙の複数の意味は、さまざまな余韻を残しつつ、確かに重奏的に響いてくる。

#### おわりに

遠藤は『沈黙』を通して第一期と言われる「西欧への対決」の時期を終え、『深い河』で集大成された「母なる神」共に苦しみ、すべてを許す神へと結集していく基盤を得た。『沈黙』における踏み絵のキリストと、『深い河』におけるインドの女神チャームンダー神の顔はほとんど同様の表情をしている<sup>(1)</sup>。遠藤は宗教を「父の宗教」と「母の宗教」の二種類に分けて考えていた。「父の宗教」というのは、神が人間にとって恐るべきものであり、またその神が人間の悪を裁き、罰し、怒るような神である。対照的に「母の宗教」というのはちょうど母親が出来る悪い子供に対してそうであるように、神がすべてを許し、人間と一緒に苦しむような宗教である<sup>(2)</sup>。

父の宗教の典型的な形を遠藤は旧約聖書のなかに見られると述べる。絶対神ヤウエは彼の支配する民族がもし異教徒の慣習に染まった時や墮落する時は、容赦無く弾劾する。怒る神、裁く神、罰する神が「父の宗教」であり、一方「人間の過ちを許し、人間の悲しみに手をさしのべる神を語ったのが新約聖書のイエス」なのである。確かに遠藤はこの『沈黙』を

通して、これまでの『白い人・黄色い人』や『海と毒薬』で追求してきたようなテーマから離れて、母の宗教に向かう足掛りを得たと言えよう。<sup>(3)</sup>しかしそれはあくまでも父の宗教という思索と経験を通して得た到着点であった。父なる宗教の基盤であった吉満義彦の思想や罪への認識、留学経験の意味を問い直す視座を持つ必要があるように思われる。父なる宗教のアンチ・テーゼとして生まれた母なる宗教を理解するためにはやはり「父なるもの」をも通過しなければならない、というパラドックスは我々の手に残されている。

\* 遠藤周作『沈黙』の引用はすべて新潮文庫、昭和五十六年版によった。

#### 注

はじめに

(1) 遠藤周作『深い河』をさぐる『文春文庫 1997 p.235

(2) 遠藤は『沈黙』により、谷崎文学賞を受賞したが、その時の受賞の言葉で「私は、この小説を書いたために、いままで私に寛大だった多くの神父たちを悲しませ、多くの信者の怒りを買ってしまった。とくに留学以来親友だった一人の神父を

傷つけ、絶交せねばならなくなったことはまことにつらいが、しかたがない」と語っている。小久保実『遠藤周作の世界』和泉書院 1983 p.23

- (3) 『沈黙』は多くのカトリック教会で禁書として扱われていた。プロテスタントの世界からも攻撃を受けていたが、神学上から文学作品が批判されるのは別の問題と意図を含んでいるように思われる。

(4) 江藤淳『成熟と喪失』河出書房 1967

(5) 井上洋治『同伴者イエス、『季刊創造』第3号 1977

## 1

- (1) 遠藤周作『よく学び、よく遊ぶ』pp.49-64 集英社 1987  
／戸田義雄編『日本カトリシズムと文学——井上洋治、遠藤周作、高橋たか子——』大明堂 1982 永藤武の遠藤に関する記述は詳細である。

(2) 遠藤周作『異邦人の立場から』講談社文芸文庫 1990

(3) 遠藤周作『切支丹時代』pp.35-40 小学館 1992

(4) 遠藤周作『お茶を飲みながら』pp.266-267 集英社文庫 1984

(5) 遠藤周作『沈黙』新潮文庫 1981 前者p.27 後者p.85

## 2

- (1) 作品全体のシンボルとして「沈黙」を捉えると同時に、個々

の意味も重要だと筆者は考える。作品研究史は 玉置邦雄『近代小説研究必携』第三巻 有精堂 1988 を参照した。

- (2) 「切支丹役人屋敷日記」は「査沃余録」という寛文二一年から元禄四年までの切支丹役所日記を下敷きになっている。川島秀一『遠藤周作——愛の同伴者』や 上総英郎『十字架を背負ったピエロ 狐狸庵先生と遠藤周作』朝文社 1990 が触れているが、詳細な分析は待たれる。

## 3

(1) 遠藤周作『お茶を飲みながら』集英社文庫 1984 p.203

(2) 遠藤周作『異邦人の立場から』講談社文芸文庫 1990 pp.239-40 切支丹への問題意識は繰り返しさまざまなエッセーで語られている。

(3) 遠藤周作『切支丹時代』p.148 小学館 1992

(4) 遠藤周作『お茶を飲みながら』p.225 集英社文庫 1984

(5) 吉満義彦『吉満義彦全集』第二巻 中世精神史研究 講談社 1984

(6) 吉満義彦『吉満義彦全集』第一巻 文化と宗教 講談社 1984 「霊性の優位」というマリタンの言葉を吉満は愛し、「世俗的なものの聖化」を言う度に口にしていたという。マリタンは二〇世紀前半の実証主義的な無神論的ヒューマニズムに對抗して「充足的ヒューマニズム」を掲げた。

(7) 『井筒俊彦対談集 叡知の台座』岩波書店 遠藤周作が無意

識の世界について語りつつ、距離感を感じた西欧思想について述べている。

- (8) 遠藤周作『異邦人の立場から』p.234 講談社 1990

4

- (1) 遠藤周作『なぜ神は黙っているのか』『異邦人の立場から』p.205

- (2) 『沈黙』とグレアム・グリーンの『権力と栄光』の影響関係は以前から指摘されている。遠藤が如何にして西欧キリスト教文学を受容したかという問題は別の機会に論じたい。

- (3) 遠藤周作『切支丹時代』p.248-52 小学館 1992

おわりに

- (1) 遠藤周作『深い河』講談社文庫 1996

- (2) 父の宗教、母の宗教について遠藤周作が語ったエッセーは多くある。一例として『主観的日本人論』『異邦人の立場から』講談社 1990

- (3) 寧ろ彼は罪の問題を踏み越えて神でさえどうすることも出来ない人間の「悪の追及」に後期の作品のモチーフを持っていた。